

三宮町の概要

▼明治6年11月 三宮町が誕生

三宮町は三宮神社があることにちなんで明治六年十一月命名された町で、出来てから百五年になる。

東は滝道、現在のフラワーロードから、西は鯉川筋まで、北は国鉄線路、南は元居留地までの区域で、現在神戸の中心地となっているが、当時は全くの寒村風景であった。

この辺りは旧神戸村の一角で、現在のトアロードは「三の宮筋」と呼ばれていた。周囲には田畑が広がっていて、近くに源平の戦いで討死した勇士「河原兄弟塚」が四、五本の松の根本に祀られているだけの西国街道筋に当たる。

三宮神社は大きな森であった。それが明治維新の神戸の開港の際に、この森をつぶして、その土で居留地の海岸をこしらえその南一面が居留地になったことから、にわか賑わいを増していった。それでも明治十五年の記録によると戸数は百二十戸で四百人が住んでいたと記されている。

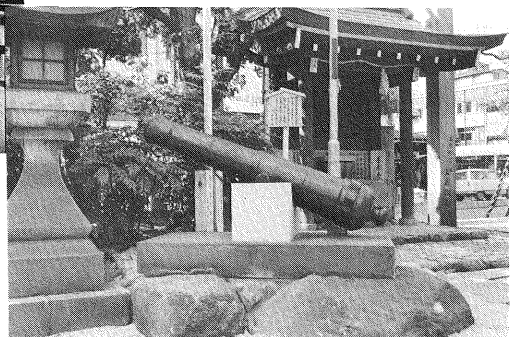
▼明治27年9月 三宮町一、二、三丁目に分れる

名もなき農村地帯であった三宮町も二十年余りたった二十七年頃には戸数が九百戸、人口三千五百余人になり、漸く町らしくなったので、この年、一丁目から三丁目まで分けられた。

一丁目は滝道から生田筋の間、二丁目は生田筋からトアロー

神戸事件の石碑

三宮神社の境内にある石碑と大砲は慶応四年一月十一日（明治元年）の前で起った大事件を記録している。この日三宮神社前を東進していた備前藩砲隊の前を外国人が横切ったことから無礼者め！と相なり大砲を打って戦った（但し死者は一人もなし）ことから、国際的大問題となった。幕府は責任者として備前藩滝善三郎に永福寺で切腹をさせ、事件は落着いた。大砲はその時の同形のもので、後日和田岬か



ら採掘されたものを、記念にこへ設置して往時を偲ぶよすがとした。現在は県政百年記念に設置された青銅プレートがある



ドまで、三丁目はトアロードから鯉川筋までで、南北に通っている道路を挟んで区切られたので、一、二、三丁目の面積は必ずしも均等ではなく、一丁目が広い。

明治三十八年に阪神電車がそごうの山側まで乗入れてきてからは、東の客が三宮へ来易くなり、目に見えて発展していく。加えて明治四十三年四月には、神戸市街電車の本線が開通し、大正元年、滝道、加納町間が開通して、いよいよ本格的な三宮町の発展を招いたのである。